

Z104a 江戸後期『暦象新書』受容の初期拡散——志筑忠雄ネットワークの再構成に向けて

矢浦晶子 (放送大学大学院文化科学研究科)

本発表の目的は、志筑忠雄（中野柳圃）による『暦象新書』（1798 – 1802）が江戸時代の知識人に与えた天文学的・宇宙論的影響を、科学史および天文学史の観点から明らかにすることである。従来の研究は明治期以降の評価に偏り、江戸期リアルタイムの理解・受容過程を一次資料に基づいて検討した例は少ない。本研究では、刊行から狩野亨吉論文（1895）までの約1世紀を対象とし、『暦象新書』が近世日本における西洋科学知の伝達経路と社会的・思想的インパクトにおいて果たした役割を検討する。現在、幕府天文方系・大坂知識人・自学派の諸資料を横断的に調査しており、馬場貞由・末次忠助・吉雄俊蔵といった志筑門弟の記述、および山片蟠桃『夢の代』、帆足万里『窮理通』、中天游『引律』などの読者候補の著作に見られる語彙・概念の対応を整理している。さらに、渋川景佑・高橋景保・宇田川榕庵ら天文方の用例、鶴峯戊申の図像資料（『天の真はしら』『地転新図』）や岩橋善兵衛の観測器具史料なども視野に入れ、受容の位相（語彙・図像・制度的利用）を分類している。今後は、1798 – 1895年の期間に確認される引用・要約・改変・批判の事例を抽出し、初期拡散ルートと後続の思想的展開を暫定年表として再構成する予定である。本発表では、現時点で得られた史料接点の整理と今後の調査計画を提示し、Cultural Astronomyの観点から江戸期天文学知の広がりを再評価する。